

---

# ダイヤモンドヴェール ーノンカット版ー

B u g o m i e l

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダイヤモンドヴェールーノンカット版ー

### 【Nコード】

N5963Y

### 【作者名】

Bugomiel

### 【あらすじ】

「エリートビジネスマンの不倫マネジメント」の登場人物が、舞台をパリから東京に移し、六本木ヒルズや東京ミッドタウンのシーンを始め、その後のストーリーを展開する。

R15

## 六本木ヒルズ

彼は、六本木ヒルズのタワーのエントランスから出て来た女性が、背中にかかった髪を、時おり風になびかせて歩いてくるのを見ていた。

少しカールした毛先が、歩くたびに背中で揺れている。

黒のラップドレスは、スリムな体型と胸のふくらみを強調して風を受ける。

背筋を伸ばしてまっすぐに歩く姿は、たとえようのない美しさと言っても過言ではないと思う。モデルウオークほど脚をクロスさせているわけではないが、まるで目に見えないラインの上を歩いているように、優雅に空気と一体化していた。

彼女は入口につないであった、小さな犬に向かって微笑むと、顔をあげ、彼を見つけて柔らかく笑う。

「隆之さん」

「君を待たせなくてよかったよ、栞」

「迎えに来てくださったの？ まだお疲れなのに」

隆之の妻は、彼の腕に滑り込むように両手を絡ませた。

「あんな愛らしい顔で微笑むから、みんな君に見とれていたよ」

「あそこにつないであった犬と目が合ったの。ほんとに可愛い目で私のこと見つめるのよ」

「一応戸外ではあるけど、ヒルズのプラザに、犬ってつないでいいの？」

「コマースヤル用なのよ。ほら、期間限定のカフェスペースが、今はiPhoneカフェになってるでしょう。もちろん、本物の次郎さんじゃないけど」

そういえば、TVでよく見かける、赤い首輪の白い北海道犬に似ている。

38歳の織田栞おだしおりは、大人の魅力で包まれてはいたが、雰囲気はあどけなさを残していた。  
聡明さの際立つ隆之たかゆきよりは、ずっと年下に見えたが、本当は三つ年下なだけであつた。

「ふふふ、本当はね、あなたと一緒にいるときのほうが、注目を集めるのご存知だった？ 私が、人に見られるの、お気に召さない？」

「いや、そんなことで僕は嫉妬なんかしない。むしろ、いいことだと思うよ。人に見られることによって女性ホルモンが分泌されて、君はますます美しくなる」

（それに君は、無邪気そうに見えて、危ない男は寄せ付けない術を心得てるから）

こうして話している間も、若いビジネスマンが、栞にさりげない視

線を向けて、視線が合わないように隆之にも目を向ける。

二人が注目を集めているのは事実だが、おそらく誰もが、自分自身を一番美しいと思っているのではないか、ここはそういうスノッビ―な雰囲気満ちた空間だった。

栞は指を伸ばして、くぼみのできた鎖骨に流れるダイヤモンドのネックレスにさりげなく触れた。

「今日の視線は、あなたにいただいたネックレスのおかげじゃないかしら」

パリのChaumetで、隆之が栞のために買ったものだ。

栞の身につけるものを選ぶセンスの良さは、隆之に備わった才能のひとつだった。

栞の誕生日プレゼントを兼ねての贈り物である。

この程度のものは、いつも妻に贈っている隆之だったが、今回はなんとなく後ろめたさを感じていた。

（別に、これは『あのこと』の埋め合わせのために買ったわけじゃない……）

栞は、海外在住の日本人のために、日本のトレンド情報を伝える小さなコミュニティ誌に記事を書いていたが、自分より夫のほうが情報通なのは明らかだった。

もともと、栞の仕事は、主婦業のかたわら、パートタイムで少しだけ携わっている程度の仕事で、

それに比べて隆之は、彼の会社でいつどのような産業に関わるかもしれないなかったから、常にアンテナを張り巡らせており、もともと規模が違う比較だったが……

「ほんとに小さなコラムなの」と本人が言つとおりで、月刊誌だったから、仕事にそれほど時間は取られない。

子供たちの学校の行事にも欠かさず参加していたし、料理も熱心な栞だった。

土曜日、栞はヒルズに新しくオープンしたカフェを紹介する取材で、ここを訪れていた。

この後、ピアノのレッスンをしている13歳の娘、薫とサッカー教室に参加している11歳の息子、祐紀ゆうきを迎えに行く予定だった。

おととい海外出張から帰って来たばかりの隆之を氣遣つて、彼を家に残して来た栞だが、こうして迎えに来てくれたところを見ると、もう疲れが癒されたようだった。

ヒルズのプラザ広場は、行き来する人で賑わっていた。

広場を囲む壁のように張り巡らされた噴水は、ときどきレース模様のようない泡を立てて壁の上を静かに流れ落ちる。まるで自分が宇宙へ吸い込まれて行くようなおもむきがあった。

巨大な蜘蛛のオブジェの下で、栞が立ち止まる。

「あ、待って、子供たちの好きなバゲットを買って行かなくちゃ。」

お昼はスモークサーモンのサラダを作るつもりなの」

彼女は、隆之の腕から手を外して、遠慮がちに彼の手のひらに指で触れた。

（人目を気にしているの？ そんな必要ないよ）

隆之は、彼女の手を取って指を絡めながら、ベーカリーへと足を開ける。

（あなたといると羨望のまなざしを向けられるのが、嫌いじゃない  
… むしろ誇りに思うわ）

栞は、愛する夫と手をつなぎながら、この上ない幸せを感じていた。

## 六本木ヒルズ（後書き）

ご存知のように六本木ヒルズはギャラクシーのテリトリーですので、ブラザのカフェスペースがiPhoneカフェになることは、現実にはまずありえないことでしょう。



## ヨーロッパの経済不安

「パパ」

13歳の薫は、最近ずいぶん大人っぽくなって、リビングルームで本を読んでいる隆之の注意を自分に向けるために、小さな手で彼の長い前髪をかきあげたりする。

「世の中は不景気なのに、どうしてパパはママにダイヤのネックレスを買ったりするの？ ボーナスだって、会社全体が伸び悩んでるって言ってたじゃない。株式投資が、そんなにうまくいってるの？」

「そんなに儲かってないよ。むしろ、地合いの影響でさんざんだ。でも不景気だから、あえて景気を活気づけるためにお金を使っている。特にヨーロッパは財政難だから。強いて言えば、困ってる人にお金を寄付すると、根本的には同じようなことだ」

「寄付とは、なんかちよつと違うような気がするけど…… つまり、経済の活性化を計るってこと？」

「…まあ、そういうこと。」

「それから、薫が経済に興味があるのなら、知っておくべきだけど、僕が株に投資しているのは、金儲けのためだけじゃない。日経平均や海外株式の動きを見ていると、世界の人々の反応がよくわかる。東日本大震災からは立ち直りが見えたのに、ヨーロッパの経済問題に対する反応で、また株価が下落している。つまりそういうときは、世の中の人々が世界経済に不信を抱いてるってことだよ。そういう情報は、パパの仕事の役に立つ」

「ふうん。でも、もし、円高が緩和されれば、売り上げはもっと伸びるのにね」

「僕は、永田町の政治家が、株価の反応に注目してないんじゃないかとさえ、思えるときがあるね。残念なこと……」

隆之はソファに座り直して娘の顔を見た。

「どうして、そんなに詳しいの？ 学校の先生がそう言ってたから？」

「もちろん、自分の考えよ！」

そこへ、栞がサラダを運んで来て、ダイニングテーブルに準備を始める。

「薫の意見だと思うわ。先生がいつも、この子の質問で困らされるそうだから」

隆之は、どうして自分の周りには、強くて頭の良い…… ちょっと頭が良すぎるくらいいの、女の子が多いのだろうと考えていた。

栞が薫にそれとなく促す。

「先生を困らせないように、質問したり意見を言ったりできるのよ。そのほうが、大人だとおもわない？」

「どうしたらいいの？」

ドレッシングをまぜて、母親がサラダを取り分けるのを手伝っていた祐紀が、ちゃっかり姉にアドバイスをする。

「ママみたいにすればいいんだよ。人に優しく接してるのに、自分の意見をちゃんと伝えて、しかも相手を思い通りにできちゃうんだよね」

確かに、祐紀の言う通り、栞は優しくて人当たりがいいが、それでいて物事を自分の思い通りにしてしまう才能を持っていた。

夜のとばりの中、外では雨が降っていた。

隆之の腕の中で静かに眠っている栞に、思わず口づけたくなるのだが、妻を起こしたくなかったので、隆之はそっと彼女の波打つ髪にキスをした。

さっきまで、彼に抱かれながら艶っぽい声を出していた彼女が、疲れ果てて眠っている。

寝息も聞こえないくらい静かな、深い眠りの中にいた。

（僕は…… 栞を裏切った罪を償うために、何をしたらいいのか。

いや、それよりも、償う方法が、一体あるのだろうか、あれからずっと思い悩んでいる。

この罪は、僕をパリまで追いかけて来た女の子、佐伯<sup>さえき</sup> 悠宇里<sup>ゆうり</sup>のせいではない。そうすることを、決めたのは自分だ。責任はすべて僕にある。

あの子はまだ24歳……

結局、僕のしたことは、どんなことをしても償えないあやまちなのだ。

僕は、この世で一番愛する女性、栞に、過去に起こった出来事の、嘘をつき通すという苦しみを、これからずっと背負って行かねばならない。

彼女を悲しませないためには、絶対に知らせてはならない。それが、僕にただひとつ残された償い……

だが、栞を裏切ることとは二度と無いと、僕は誓う

## ヨーロッパの経済不安（後書き）

隆之は自分の責任だと言っていますが、実は彼をパリまで追ってきた悠宇里の責任も大きく、彼は決定権を持つものとして、（後悔と言っわけではなく）自分を責めています。

詳しくは「エリートビジネスマンの不倫マネジメント」をご覧ください。

## 東京ミッドタウン

乃木坂寄りの六本木にある隆之の自宅からは、横浜支社に通勤するより、東京本社に出社するほうがずっと便利だった。

だが、また東京の本社に通う日も、そう遠くない。

彼が半年前に、東京本社 of 課長から横浜支社の企画部長に栄転になったとき、会社の経営者から、1〜2年間、横浜支社の経営を、事実上一任すると言われた。

支社長は海外出張が多く、強力なアシスタントを必要としていた。

いわば企画部長 兼 支社長補佐だったが、過去に例がなかったので支社長補佐の部分は公にされず、権力だけが与えられていた。もちろん、支社長とその上層部は承知していたから、隆之の意見は優遇されていた。

そして彼の成績が良ければ、数年後、東京本社 of 相当な権威のある地位につけると約束されていた。

横浜支社の経営は順調に行っており、彼は週に一度、東京本社を出張で訪れていた。

- - - -

その日、隆之は帰国後はじめて、東京本社 of 営業部に顔を出した。

何事もなかったように装ってはいたが、悠宇里は少し痩せたようだった。

肩にかかる波打つ髪も、心無しか輝きが少ないような気がする。

最後にパリで別れてから、6日しか経っていなかったけれど、隆之の目には変化が明らかだった。

彼が休憩室の前を通りかかると、若い女子社員がみんなにお菓子を配っていた。

「あ、部長もおひとついかがですか？」

そう言つて、女性社員は隆之に九州の銘菓を差し出す。

「ああ、ありがとう。誰かのお土産？」

「佐伯さんです。先週、九州の温泉に行つてたんです」

「ね」と彼女は悠宇里を振り向く。

隆之は、いきなり咳き込んだ。

先週と言つのは、彼がパリに出張していて、悠宇里がそれを追いかけてきた週のことだ。

「へえ、君…九州に行つてたんだ」

「ええ」

人が大勢いる休憩室なので、平静を装う悠宇里と隆之だった。

二人で一緒に過ごしたことを、悠宇里がカモフラージュしてくれているのだが、かなり身に応えているのに、こんなに何気なくしてい

られる彼女が、むしろミスティアスだった。

- - -

その日の夕方、隆之と朝倉広樹あさくらひろきは、東京ミッドタウンの檜町パークが見渡せるレストランバーにいた。

外では、広い芝生の上で、夜空に虹をかけるイベントが行われていた。

噴射する霧や水しぶきに、カラーレーザーを照射して、虹と星のシヤワーを演出する。

霧の花火が打ち上げられると、人々がきゃあきゃあ叫び声を上げて、まるで子供に帰っていた。

シヨットグラスを傾けながら、隆之がたずねる。

「…で、彼女は、九州に行ったことになってるわけ？」

「そうです。一週間ずっと有休を取ってたので、何か理由が必要だったんです。お土産なんて、今時ネットでも、羽田でも、どこでも手に入りますから…」

「ふうん……」

「もうそのことには触れないで下さい。なんか、恥ずかしくなって



くるから。疲れてたし、他に理由が考えつかなかったんですよ。パリから帰って来たばかりで」

「恥ずかしがる必要はないと思うが……で、朝倉はどんな理由になってるわけ？」

「僕は二日しか休んでないんで、誰も僕のことなんか気にしてません」

「彼女、あれから大丈夫だった？」

「……なわけないでしょう。パリにいた間は、あまり食べ物喉を通らないみたいでしたよ。必死で元氣そうに装ってたけど……帰りの飛行機が一緒だったから、僕が家まで送り届けました」

「……ありがとう」

隆之は、いつも食欲旺盛だった悠宇里を思い出して、彼女の心の傷がどれほどかと思い遣る。

職務命令とはいえ、彼女一人をパリに残して帰国するのは、無責任だと思っていた。

ちょうどそこへ、広樹が現れて、悠宇里を見守ってくれたのだ。

「かわいそうに……ずっと心配していた。僕の責任だから」

「まだ、彼女のことが好きなんですか？」

「どういふ『好き』って意味かによると思うけど。栞より愛してい

るという意味ではないのは確かだ」

「そもそも、比べる対象じゃないでしょうね。妻であり母親であり…… 社会的な役割を果たしている女性と……」

別に、悠宇里が悪いって言うてるわけじゃなくて…… 彼女は、独身の若い女性の役割を果たしている。それはごく当然のことだし……」

隆之が何か言いたそうだったので、広樹はすぐに言い訳をする。

「あの…… 僕は、独身の女性の社会的地位を認めてないとか、そういう観点で話してるんじゃないよ。今の発言は、女性の前では絶対に言いません」

「営業担当らしく、多角的なものの見方ができるようになってきたね」

広樹は、グラスの中の氷が溶けるのを見ながら、遠い目をする。まるで氷の中にパリの風景を見ているかのように……

「まあ、行き着くところまで行かなければ、悠宇里の気が済まなかっただろうっていうのも、何となくわかります。

僕は、彼女にまだ告白してないんだから、何も言う権利はありません。裏切られたわけでもなんでもないし……」

「何か想像してるらしいけど、そういう事実は無かったことを、忘れないで欲しい」

（あくまで、言い張るんですね）

広樹の見透かすような目に、今度は隆之が心の中で言い訳をしてい

た。

（それが目的でパリまで来た彼女に、もし、何もしなかったら、悠宇里のプライドを相当傷つけただろう。それは僕の、ただの都合のいい自己弁護かもしれないけれど…）

「彼女を傷つけないように、守ってあげてくれないか？」

「一番傷つけてるのは、部長じゃないですか」

「それだけは、どうしようもない……」

悠宇里を幸せにするために、僕にできることは、彼女に僕を忘れさせることだけだ。

お前には、もつとたくさんできることがある」

「それって、僕、彼女のお相手として部長に認められたってことですか？」

「まだ、お前が選ばれるとは限らないよ。他に男はいくらでもいる」

広樹は嬉しそうに口角を上げて、隆之を見た。

「部長は、お気に入りの人にだけ、そういう意地悪な口調になるんですよね」

「幸せな奴だな、ほんとに。まあ、朝倉が悠宇里を迎えに来たのは、ポイントが高い。彼女がパリに来ていることを見抜いたのはお前だけだ。悠宇里も、自分のことにそれほど関心を持ってくれた男のことは、きつと忘れないだろう」

## G a s s i p   a t   G a s t o n   &   a m p ;   G a s p a r

まもなく、パリ支社、横浜支社と協力して東京本社にプロジェクトが立ち上がった。

日本の大手のクライアントがフランスに事業を拡大するため、世界的に事業を営むこの会社の協力を求めてきたのだ。

隆之と広樹もそのメンバーだった。

フランス語が得意な悠宇里もメンバーに選ばれたが、同じミーティングに参加していても、隆之と話すことはほとんどなかった。

パリでの出来事が起こる前は、隆之が東京本社を訪れるたびに、悠宇里とよくおしゃべりしていたのに、最近はあまり口をきかなくなってしまった二人だが、人びとはまだ違和感を抱いていない。

このごろ悠宇里は、広樹と話す機会が多く、彼が彼女の新しいお気に入りなのだというように、自然に理解されていた。

- - - -

10月は終わりに近づいて、ハロウィンムードもそろそろ終盤となり、ショーウィンドウのディスプレイは、すっかり冬になっていた。

街では、秋色のコートをまとう人びとも見られる。

昼休み、会社では女子社員たちが数人、給湯室に集まってうわさ話が飛び交っていた。

「…それでね、朝倉さんと佐伯さんが一緒のところを、羽田で見かけたんですって。スーツケース持ってたらしいの」

「えーっ、朝倉さんって、この間のお休みのとき悠宇里と一緒にだったの？ 途中から合流したってこと！？」

「そんなぁ… わたし、朝倉さんに憧れてたのに…」

- - - -

広樹は、昼食を食べているとき、ケータイの振動に気がついて、受信したばかりのメールをチェックした。

“ 今日、時間ある？”

差出人は悠宇里だった。

- - - -

「珍しいね。君からのお誘いなんて」

仕事の後、二人はパスタとソースを選んで、自分だけのオリジナルパスタを楽しめるレストランで、向かい合って座っていた。

悠宇里は少し食欲が出て来たようで、ホタテのクリームソースパスタを食べている。

帰国したばかりの頃は悲しそうだったが、いまは肌もつつすらとピ

ンク色で、何となく大人の雰囲気を帯びて、前より一層きれいになったような気がする。

彼女の願いが叶えられたことで、気持ちがいっぱいだったのだろうか。

いや、もしかしたら、短期間ではあったが、あの人の心も彼女に注がれたのではないか。

「あの噂、あなたが流してるの？」

「ウワサって、何のこと？」

「誰かが、私たちを羽田空港で見かけたっていう噂よ」

「それって、噂じゃなくて、事実だけど。でも、僕はみんなに言うてないよ」

「ほんと？」

「本当だってば。誰かに見られてたんだと思うよ。日曜日なんて、前泊で出張に出かける奴多いし、最近は羽田も改装されて、飛行機に乗らなくても、遊びに行く奴いるしさあ・・・」

悠宇里は、広樹の言葉を信じていいものかどうか、無言で彼の顔を見た。

「もし、僕がそんな噂を流して君を縛り付けたら、君が本当にあの人のことを忘れたのか、それとも成り行きで僕に惹かれているのか、わからないじゃないか。僕にだってプライドってもんがあるだろ？」

そう、確かに広樹は悠宇里のことを待っていた。  
彼女に強引に手を出そうとは思わないで……

パリで過ごしたときも、例えば偶然に彼の腕が悠宇里の肩にぶつかったり、そんな些細なことで、敏感に反応している悠宇里を見ると、広樹は、彼女が落ち着くまで何もせず、見守ろうと心に決めたのだった。

「……そうね。わかったわ。疑ったりしてごめんなさい」

「誤解が解けたのなら、それでいいよ」

悠宇里はテーブルの上にそっと右手を伸ばしてきて、広樹の指に遠慮がちに触れた。

彼が傷ついていないかどうか確かめるように、おずおずと。

広樹は、差し伸べられた悠宇里の手を受け、上からそっともう片方の手を添えた。

（プリンセスが、握手を許してくれたってことかな…）

## 屈託のない分かりやすい性格の朝倉広樹先輩

「完璧すぎる男って、女性としては気が引けるってこと無いのかなあ……」

広樹が、悠宇里につぶやく。

今日は日本のクライアントから幹部が訪れており、こちらの社からは、フランス人のパリ支社長と隆之が応対していた。朝からずっと、公用語は英語で企画部門のプレゼンテーションが行なわれている。フランス語訛りの強いパリ支社長の英語と、日本語訛りの抜けきれないクライアントの英語の中で、ほぼネイティブイングリッシュに近い隆之の発音をさんざん耳にして、広樹は食傷気味になっていた。休憩時間に営業部の前を通り過ぎていく時、隆之が長い前髪をかきあげたので、女子社員が憧れのまなざしと共にため息をついたのが、広樹をいらいらさせてつい悠宇里に不満を告げた。

「完璧ってこともないと思うわ。パリの地下鉄が苦手みたい。特にあの、狭い4人がけの座席に向かい合って座る部分が…… 日本の電車は、混んでも大丈夫なんだって……」

広樹がじつと悠宇里を見ているので、彼女はあわてて付け加えた。

「……って、聞いたけど……」

「そついうのが母性本能をくすぐるわけ？ 誰だって怖いよあんな電車、自分が窓際にいる時に、通路側に大きな人に座られたりしたら動けないから。車体も古くて汚いしさあ…… なんで日本のみたい



に快適な車両が作れないのかなあ……」

「だから、つまり、強がらないで、自分の苦手なところを認めるところがカワイインじゃない？」

不公平だと広樹は思う。

完璧な人の中にあるほんの少しの弱点は、カワイイになって、普通の人間の場合は、ウィークポイントはただの弱みだ。

「あなたももう少ししたら、相応になれるんじゃない？」

そういえば、以前自分も悠宇里に同じようなことを言ったことがあった。彼女がもう少し年を重ねれば、もっと大人っぽく魅力的になれると。

（結構、心地いい褒め言葉だな。未来への可能性が感じられて……）

すぐに機嫌をよくする、広樹の分かりやすい性格も、ある種のかわいらしさだと受け取られていた。

## 銀杏の季節

いよいよ11月に入り、すっかり日が短くなってきた。  
金色のイチョウの葉が街に散り、まるで絨毯を敷きつめたようだった。

その日、会議室では前回のプレゼンテーションの報告書について、クライアントからのコメントをチェックしていた。

大体において既に承認されていたが、まだ契約までになんかなり調整を必要とされる。

広樹は隆之に主張した。

「この間のプレゼンでこの箇所飛ばしましたよね、この企画の斬新さを示す大事な所なのに」

「ああ、クライアントが眠そうだったんで、昼食にした方がいいと思ったんだ。食事中にその件について質問を受けたから、こちらで直接説明しておいた。よく気づいたね。省略したこと」

「僕だってそのくらいの英語分かりますよ。一応、ボストンのビジネススクール卒業したんですから」

「まだこれから、クライアントを招いて、技術や営業の詳しい説明会があるから、営業部門の説明は君に任せることになってるんだよ。よろしくね、朝倉くん」

隆之からの突然の大抜擢に驚いていると、広樹の上司の営業部長は合意しているらしく隆之に向けて頷いている。

「あ、今度は日本語で大丈夫だよ。パリ支社の営業担当は日本人だから」

そう言われて、広樹は安心していいのか緊張すべきなのかよくわからなかった。

ただ、悠宇里が笑いをこらえているのは見逃さなかった。

- - -

会議室を出ると、広樹と悠宇里を含め、若手社員たちは昼食に出かけた。

「朝倉さん、今日は時間無いから、コンビニ弁当ですか？」

「ああ、そうしよう」

広樹の返事を受けて、今年入社したばかりの本田和彦が、コンビニに入ろうとするのを広樹は止めた。

「ちょっと待つて。ここはライバル会社のコンビニだ。その角を曲がったところにうちの傘下のコンビニがあるだろ。そこで買おう」

コンビニと自分の部署とは事業部も違っていたが、会社の利益を追求するよう、広樹は新人に手本を示している。

悠宇里は、今まで広樹のそんな一面を見たことが無かった。

（ふうん、意外と愛社精神あるんだ）

「きつと本田さんは、ライバル会社の偵察をしようとしてたのよね」

悠宇里がフォローしたので、和彦はほっとしたようだった。

広樹の言い方は、特にきついわけでもなかったが、おそらく和彦は、初めてプロジェクトに選ばれて緊張していたのだろう。

和彦が勘違いしてうつとりと悠宇里を見つめているので、広樹は構わず足早に歩き始めた。後輩社員たちはあわてて後を追う。

## The Edge of Glory - 栄光の果てに -

翌週、ミーティングの後、書類をアタッシユケースに片付けていた隆之に、広樹が訊ねる。

会議室に残っていたのは二人だけだったが、広樹は用心深く声を落とした。

「このプロジェクトが終わったなら、本社に栄転ですか？」

「まあ、たぶんね」

「ヴァイス・プレジデントの椅子が、待ってるってわけですね」

隆之の手が止まった。

「心配しないで下さい。そんな噂流れてませんよ。僕のただの想像です。でも、当たってたみたいですね。事業部長を飛ばして昇進なんて、ちよつと驚きです……」

「先のことは、まだわからない。だいたいこんな大きな会社の副社長なんて、すべてを自分で築き上げたクライアントの社長に比べれば、何もわかってないんだよな。リスクも少ないし」

今のプロジェクトのクライアントの社長は、自分で事業を初めて、フランスに進出するまでの大きな会社に育ててきた人だった。そのような人に比べれば、自分はすでに経営基盤の出来上がった大きな会社で働いてただけだと謙遜している。

しかし、経営者の血縁でもない隆之が、副社長の地位まで上り詰めるのは、やはり群を抜いていることに違いない。

「何かあった時に、責任を取って止めさせられる駒だとも言える。そのために何人も副社長を置いておくんだよ。ま、以前の上司の直接上になるわけじゃないから、仕事はやりやすいけどね」

以前の上司の直接上どころか、何段階も上だ。

「そういえば最近、女の子たちが浮き浮きしてますよ。悠宇里が部長とあまり話さなくなったから、自分が次のお気に入りしてもらえるかもって」

「興味ないな。そういうの」

「また誰か、出張先までついて行ったりしたら…」

隆之は、怒りの無い静かな低い声で、だがきっぱりと宣言した。

「そんなことは、もう、決して誰にもさせない」

隆之の後ろ姿を見送りながら、広樹は心を揺さぶられてしばらく立ち尽くしていた。

（人は誰もあやまちを犯すことがある。

それを悔い改めれば、許されてもいいんじゃないだろうか……と  
いう気がする。

それは、倫理を逸脱した、いけないことのはずなのに、

あの人の態度がかっこ良く見えるなんて……)

いつのまに來たのか、悠宇里が広樹の傍に立って、隆之の後ろ姿を見送っていた。

「迫力あるね……」

広樹がつぶやいた。

「この前も言っただけど、あの人の強さは、自分の利点だけでなく、欠点も受け入れることだと思うの。完璧になろうとしないで、弱いところも認めて……でも、自分で結論を出して決めたことは、絶対やり抜くのよね」

「確かに、そうだね……　まだ、そんなに好きなの？」

「……ん、以前とはちょっと違うけど……　べつに、嫌いになる必要はないんじゃない？　でも、もっと好きな人ができることは、あるかも……ね」

悠宇里は広樹の腕にそっと両手を添えて、優しく笑いかけた。

「プロジェクトの準備はかどってる？　手が空いたらあなたを手伝うように言われてるの」

「まあ、何とか」

「大役がんばってね。朝倉さん」

明らかにからかっている口調だ。

四つも年下の悠宇里に、このまま自分を子供扱いさせておいていいものだろうか、広樹は思いをめぐらせていた。



## The Edge of Glory

- 栄光の果てに - (後書き)

41歳は「想像もつかないくらい年上」に思える読者のみなさんもいらっしやるかもしれません、ブラッド・ピットが、映画トロイでアキレスを演じていたのが41歳でした。

隆之さんがブラピほどかっこいいかどうかは定かではありませんが

...

## ダイヤモンドヴェール

その週の金曜日、悠宇里はメールを受け取った。

“君に見せたいものがある。今夜、7時55分に、増上寺とパークタワーの間の庭に来てくれる？”

広樹のメールはいつもちよつとわがままだ。

それでも一応、彼女の仕事のスケジュールは把握しているし、今日は11月にしては暖かく、天気もよいことも考慮しているらしい。

- - - - -

ここは、パークタワーホテルのプライベートな敷地のはずだが、もう片方の入口は公園とお寺の延長線上にある。ホテルのコートヤードと増上寺の庭が融合しているような、誰でも訪れることのできる不思議な空間だった。

ガラス張りのバンケットルームが、庭の中に温室のように建っている。

広樹はその横で待っていた。

「見せたいものって、なあに？」

「あれ」

「東京タワー？」

広樹の指差した方向には、足元からのダイナミックな東京タワーがそびえていた。

通常のオレンジのランドマークライトが、8時になると、ふっと消えた。

代わりにダイヤモンドヴェールと呼ばれる、ライトアップが、じわじわと明るくなって来る。

灯りがひとつひとつ独立して見える、まるでダイヤモンドをちりばめたような照明だ。

この光は七色に変化する機能を持っているのだが、今日は水のような澄んだ青、アクアブルーだった。

その日によって違う色がともされる。週末と祭日の夜、2時間だけの特別なライトアップである。

「僕はまだ、お金持ちじゃないから、豪華なダイヤは買えないけど、二人で、ダイヤモンドヴェールが点灯される瞬間を、見たかったから。来てくれてありがとう」

悠宇里は、嬉しそうにふふっと笑う。

一緒にその瞬間を見たいというセリフを、恥ずかしがらずに言い切るような人、そして、それが似合う人が悠宇里の寵愛する人だった。

「私は、ダイヤモンドなんか買って欲しいと思ってない。こっちのほうで感動したわ。ダイヤモンドヴェールはいつも見てるけど、点灯される瞬間は初めてですもの。しかもこんな近くで」

広樹が、悠宇里の肩に腕を回した。

悠宇里は、自分の肩に置かれた彼の手に、そっと指で触れる。

彼のコートの袖が、とてもなめらかな生地で触りごこちが良かったので、思わず頬を近づける…

…と、それは、気づいていなかったが、あたかも悠宇里が、何か言いたそうに、彼の腕を引っぱっているようにも認識される行為だった。

そのとき、広樹が悠宇里のもう片方の肩を抱き寄せて、少し身をかがめた。

彼の唇が近づいて来て、悠宇里の唇に触れる。

柔らかくてしっとりとした感触が伝わってくる。

そのあと、触れるか触れないかのところで一度唇が離れたように感じた。

そしてもう一度、さっきより少し長く唇を触れさせる。

かすかにミントの香りがしたことは覚えているが、頭の中が興奮して一瞬記憶が飛んだ。

気がついたときは、彼の胸に頬をうずめてていた。

（知らなかった、ディープキスより感じる、ソフトなキスもあるなんて…）

二人の後ろには、パークタワープリンスホテルが東京タワーと対をなして立っていた。

「あそこのスカイラウンジにブリーズヴェールっていうレストラン

があるんだけど。お腹空いてない？」

「ええ。すつごく、空いてる」

- - - -

天窓が高く、開放感のあるレストランで、二人は海の見える席に案内された。

ここからの夜景は、夜空に宝石をちりばめたように街のイルミネーションが輝いている。とりわけレインボーブリッジは、光がまぶしく点滅して、群青色の海に刺繍をほどこしていた。

色とりどりのオードブルが、絵画のように一皿に描かれたプレートを存分に味わった後、メインディッシュの魚のポワレを楽しみながら、悠宇里は、少し長くなってきた広樹の髪に目を向ける。

「最近、髪が伸びたのね。上司に注意されないの？ 営業なのに」

「されないよ。実力のある社員は例外を認められてる。今、伸ばしてるんだ、絶対このほうが似合うから」

広樹は余裕のある笑みをたたえて、鯛のポワレを一口頬張った。悠宇里は思わずクスッと笑う。

「ごめんなさい。誰かを思い出しちゃったものだから。前髪は、今の長さが一番似合ってると思うわ」

「これ以上伸ばさないよ。別に、誰かを意識してるわけじゃないんだから」

「大丈夫よ。あなたは全然違うもの」

話題を変えるのにふさわしく、デザートが運ばれてきた。

「今日って、遅くなってもいいの？」

「…ん、そうね。家に電話すれば… たぶん大丈夫」

「もちろん僕が送ってくから、もっと違う角度からの東京タワーも見て行こうよ。プライベートな部屋から」

「ええ、いいわよ」

悠宇里は、とまどうことなくそう答えると、自信たっぷりの微笑みを返した。

普通は恥じらいを見せたりするところだろうか。広樹には、迷わずあっさり答える悠宇里の潔さが、駆け引きのない、彼女の純粹さを強調しているように思えた。

## プロポーズ

客室からの東京タワーは、圧倒されるように迫ってくる。高層階にいるためだろうか、さつき庭から見上げていた時よりも間近に、二人の目の前に塔がそびえている。

「君が受け入れてくれるのを、ずっと待ってた」

「あなたが何もしないから、自分に魅力が無いのかって思ってたわ」

「そんなわけないだろう」

広樹は悠宇里の背中を壁に押し付け、強引に唇を合わせる。彼の腕に囲まれ、悠宇里は動けなくなった。

「ずっと、前から好きだった。君が別の人を追っている間は、何を言っても僕を見てくれなかったから、その時が来るのを待ってたんだ」

（だが君は、その人を追いかけて行ってしまった）

あれからもう二か月になろうとしていたが、まるでその時の苛立ちを思い出したかのように、悠宇里の上着を腕の途中まで降ろして身動きできなくなると、今度はブラウスのボタンを外し始める。

「ちよつと、まっ… あ… んっ」

広樹の力強いキスで、悠宇里の口が塞がれた。ひたむきに唇を吸われ、甘く噛まれる。

（僕は、じゅうぶん待ったよ）

彼女のはだけた胸のレースのキャミソールをさらに押し広げ、広樹はすでに固くなっている乳頭を口の中で転がし始める。

「い……や……」

「シャワーは浴びていいから… 僕が脱がせる」

唇や舌で彼女の肌を熱く燃えさせながら、時間をかけて、服がはぎ取られていった。

なぜ、それほどまでに広樹の与える刺激を、身体が甘く受け入れるのか……

自分がそんなに彼に心を奪われていたことに、悠宇里は今まで気がつかなかった。それとも、身体が欲しているだけなのか……

シャワーを浴びる前に、彼女は既に目眩を起こしそうなほど気が遠くなっていた。

?????

熱いお湯でせつかくいつものように頭が研ぎ澄まされたと思っていたのに、彼が触れただけでまた肌が燃え始める。ベッドの上で、髪をかきあげられてうなじにキスを受けると、悠宇里の背筋にぞくつと刺激が走った。

広樹が悠宇里の両脇に手を差し入れて身体を持ち上げ、ベッドに座



っている自分の上に乗せた。

とまどう彼女の腰を両手で包み込み、薄いシルクのローブの紐をほどいて、胸を開け、手を下から上に、腰から胸に滑らせる。

「……あん」

悠宇里は甘い声を漏らして身体を反らせた。

彼の両手の中に包み込まれてしまいそうな細い腰。胸はふつくらと丸みを帯びたカーブを描く。決して大きくはないのに、腰が細いで胸のボリウムが際立って見える。

ローブは、まるでドレスを脱がせるように、妖しく波打って肩から滑り落ちた。

こんなにも、悠宇里の感性が研ぎ澄まされているのは、彼女が自分に酔っているからだと思いたい。

悠宇里の過去の記憶を消し去って、自分の思いを刻み付けようと動く広樹は、やがて彼女に魅入られ溺れていった。

「あ……ん……ああつ……！」

がまんできないくらい焦らされていた悠宇里は、解き放たれたように高みに登りつめる。

彼の腕に包まれながら、乱れた呼吸が戻ってきてずいぶん経ったと思ったが、ときどき、波がまだ悠宇里の身体の中に押し寄せてきていた。

午後10時、

東京タワーのダイヤモンドヴェールが消灯される。

17段の光の階層が、下から一段ずつ消えていく。

それを見ながら、広樹は悠宇里を抱き起こして思いを告げる。

「東京タワーみたいに、276個のダイヤは無理かもしれないけど、1個ぐらいなら何とかなれると思うよ」

「それって、プロポーズ？」

わかってよと言いたそうに、悠宇里の目をのぞき込む広樹の言葉が熱く心に響いた。

「結婚してくれる？」

「……Yes」

広樹が今までに見た中で、一番愛らしい悠宇里の微笑みだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5963y/>

---

ダイヤモンドヴェール　ーノンカット版ー

2011年12月1日20時50分発行